

「子育てサポート企業」 (くるみん) の認定を受けて



群馬大学長 平塚 浩士

平成27年5月14日、次世代育成支援対策推進法（くるみん）の認定をいただきました。教育・研究機関として県内では初の認定で、大変晴れがましく、また同時に、責任の重さを感じています。

現在、日本では全員参加型社会の構築が求められております。強靱でしなやかな日本を構築するには、男性だけではなく、女性や外国人など多様な人々から構成される社会を実現することが必要です。このために、各職場において仕事と家庭を両立させる取組が進められていますが、本学においても、現在、女性研究者を増加させる取組を進めているところです。

本学の次世代育成支援の取組は、医学部附属病院の教職員や大学院生の子育て支援のため、平成19年に「ゆめのご保育園」を設置したことからスタートしました。さらに、出産、育児で第一線を離れた女性医師の復帰支援の取組も行ってきました。次世代育成支援対策推進法に基づき平成22年から策定した行動計画では、ノー残業デーの設定や休暇取得の促進などの取組を進め、その結果、2名の男性職員が育児休業を取得するという成果をあげることができました。平成25年には、男女共同参画社会の実現に向けて、「国立大学法人群馬大学男女共同参画推進基本計画」を策定し、活動の母体となる「男女共同参画推進室」を設置しました。さらに、現在は、女性研究者の出産や育児、介護などのライフイベントを支援する女性研究者研究活動支援事業「蘭玉プラン」に取り組んでいるところです。

この度の認定を契機に、本学においてもワーク・ライフバランスの取組を一層推し進め、より良い次世代育成支援体制を構築したいと思います。



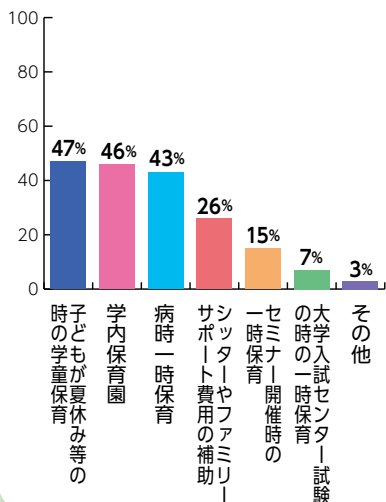
認定を受けるには、従業員の子育て支援について「一般事業主行動計画」を策定して目標を達成すること、女性の育児休業取得率が70%以上であること、男性の育児休業等取得者がいること等、一定の基準を満たす必要があります。

育児・介護に関するアンケート 調査報告 <育児編>

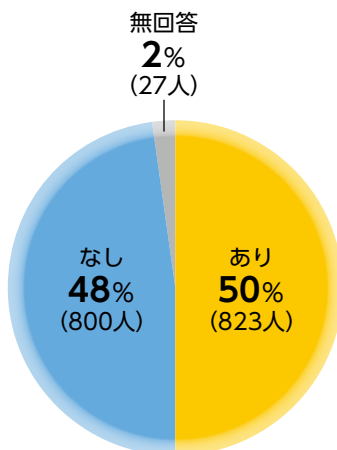
5月下旬～6月中旬に実施いたしました「育児・介護に関するアンケート」では多くの教職員の方々にご協力いただき、誠にありがとうございました。今号（育児編）と次回9号（介護編）の2回にわたり、アンケート結果を一部抜粋して報告いたします。

育 児

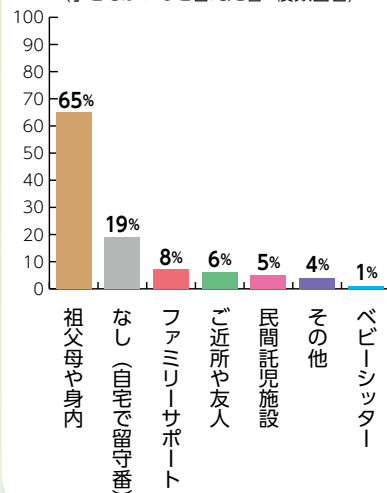
学内にどのような保育サービス
があったら利用したいですか
(全回答者・複数回答)



子どもの有無 (全体)

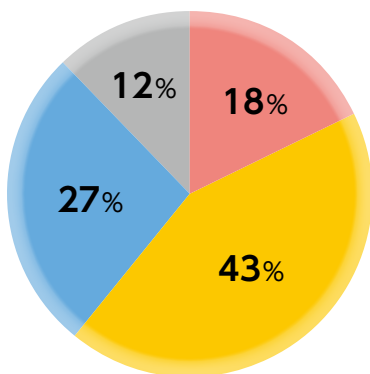


利用している公的施設が利用
できない時の子どもの預け先
はどこですか
(子どもがいると答えた者・複数回答)



子どもの夏休み等、試験的に学内で一時保育を
実施した場合、利用しますか？

- 利用する
- 内容によっては利用する
- 利用しない
- 無回答



結果をふまえ試験的に
一時保育を実施しました！

群大まゆだまスクール in あらまき



詳細は次号に掲載いたします！

調 査 概 要

■ 調査目的

ライフイベントの中でも特に就業が中断されやすい育児や介護に関する事項を調査し、職場環境の改善に必要なニーズを探ることを目的とする

■ 調査対象者

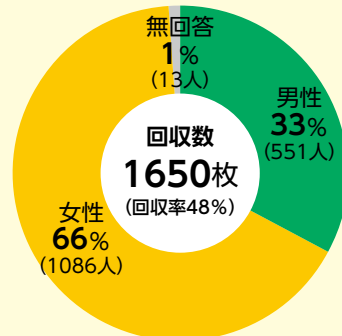
全教職員（※非常勤講師、TA・RAは除く）

■ 調査期間

平成27年5月22日～6月12日

■ 総配布枚数

3436枚



回収内訳(全体)

「シンガポールにおけるダイバーシティ・男女共同参画とインターカルチュラル演劇」開催 ‘Diversity, Gender Equality, and Intercultural Theatre in Singapore’

シンガポール国立大学文学部英語英文学科
ヨン・リーラン准教授



女性研究者の国際的な視野を広げる啓発活動として、まゆだまプラン開始以来初めての英語による国際セミナーを5月7日に荒牧キャンパスで開催しました。和泉孝志研究担当理事・男女共同参画推進委員長による挨拶に続き、シンガポール国立大学ヨン・リーラン准教授が講演されました。多文化を反映したご自身の出自にまつわるお話や多文化主義先進国シンガポールの社会状況、多文化社会の諸問題と対応策などの説明に、聴衆は興味深く耳を傾けていました。留学などの海外経験は、研究職を目指す女子学生にとって、言語や知識の習得だけではなく他民族や文化を寛容する姿勢が身につく貴重な機会となることも示唆されました。また、ご自身の国際的な演劇研究についても紹介されました。代表を務めるA|S|I|A (Asian Shakespeare Intercultural Archive) は、アジアのシェイクスピア上演を4ヶ国語の字幕付きで観ることができるウェブ・アーカイブで、現在世界の大学や研究機関での利用が広がっているとのことでした。

今回の出席者は24名で、大学上位職にある教員や関連分野の仕事に携わる職員の参加率が高く、本学教職員を広く啓発する良い機会となりました。

役員等と女性教員のランチミーティングを開催

学長、理事、監事、副学長の皆様と女性教員とのランチミーティングを、桐生（6月23日）及び荒牧キャンパス（7月14日）で開催しました。キャンパスで女性研究者の「顔」が見えないとの学長や理事からのご意見にお応えする形で企画された本交流会は、女性研究者や男女共同参画推進室員から様々な要望を直接学長等にお伝えすることも目的としています。終始和やかな雰囲気の中、女性研究者の置かれている状況、施設環境や学生教育などについて活発な意見交換が行われ、有意義な会となりました。荒牧・昭和キャンパスは女性教員数が多いこともあり、今回はまず教授の皆様にお集まりいただきましたが、今後は若手女性研究者の皆様との交流会も企画してまいります。毎年継続的に開催の予定ですので、奮ってご参加ください。

桐生キャンパス



荒牧キャンパス



医学系研究科長インタビュー ～男女共同参画を語る～

インタビュイー **峯岸 敬** 医学系研究科長・医学部長
(産科婦人科学教授)

インタビュアー **永井 弥生** 男女共同参画推進室
副室長

長安めぐみ 男女共同参画推進室講師



永井：医学系研究科長になられて、いかがですか。

峯岸：今僕が考えているのが、学内での共同研究を盛んにすることです。自分の興味がある科や研究部門があれば群馬大学の中の施設を使って、全体として学内の中でのコラボレーションを進めたいですね。

長安：同じ場でやっていたらネットワークができてきますね。

峯岸：そうですね。前任の和泉先生がそういった機械を揃えてくださっているので、整備していきたいです。集約化できれば、比較的共通の研究ができると思いますよ。どんなことができるという広報も必要で、大学院レベルでの研究者の教育ができるようなシステムとして活用できたらと思っています。また、医工連携は大学全体の意向なので、もっと宣伝したいですね。

永井：若い人に研究の魅力
を伝えるとしたら？

峯岸：難しいですね。僕は研究が好きだったから、家庭を顧みず、土日もずっと実験室に詰めるみたいな(笑)。そうやれとは言わないし、同じようにやった方が良いとは思わないけど。



長安：今の若い先生方は家庭も研究も診療もみんなやりたいという人が増えてきているのでしょうか？

峯岸：そういう意味でバランスが取れていると思うのですが、自分の特色を見つけてやるというのも必要ではないかな。そういう時期があって、集中してやってもらうのもよいのですが、継続するというのも大切なので、なかなか難しいですね。

永井：臨床をやりたいという人は、そういう考えでもよいかと？

峯岸：ただ、みんなに言うのは、基礎研究に集中してやると仕事をまとめるとか、論理的に物を進めるというのがどういうことなのかかわかる時期があるので、それは臨床にも上手に反映できる。そういう考え方をトレーニングするために一定の期間基礎的な研究に従事しても良いのではないかと。

永井：それは男女問わずですよ？

峯岸：そうですね。ただ、女性の場合、特に男性よりも色々プランニングをちゃんとしなくてはならない部分が多いので。でも、「大丈夫だよ、妊娠しても何とかかなるんじゃない」という感覚でもよいのではないかと。

長安：大丈夫だよ、続けられるよっていうプランというのは常に考えていないと難しいですね。

峯岸：あまり冷静に考えないとか……(笑)。どういう状況でもそれぞれの個性として受け入れることの方が大事かなと思います。自分たちの多様なプランに沿って一緒に考えましょうということかなと。

長安：女性は、チャンスが来た時にちょっと引いてしまうことがあるのかと。自分で決めていく練習も必要だし、自分の力を知る機会が要るのかと思います。

峯岸：難しいですね。以前にびっくりした話ですが、今ある大学の教授になっている人が、若いころに教授から「君の人生を決めるのは君ではないんだよ」と言われたというんです。教授が勝手に後輩の人生を決めるという意味ではなく、「お前はできるよ」と言ってくれる人がいて、初めて人生が開けていくこともある、という思い出なしのひとつなんですけど。指導者としては、そういった意味を含めて言っていることも多いです。

長安：海外では女性が国を代表するような立場になるのも当たり前になってきていますよね。

峯岸：以前カナダにいましたけれど、産婦人科は女性が多いので、その中で教授とか指導者に女性になる人が多いと思いましたね。家庭の仕事もシェアするのが当然ですから。

長安：最後に何かございますか。

峯岸：少子化が問題になっているけれど、女性にばかり早く産むようにという対応は失敗している。一番大きいのは社会なんですよ。組織がどのように対応を取るかという現実的な問題があり、それが上手いかわからない限り、少子化は改善しないと常に言っています。

永井・長安：本日はありがとうございました。